

すぐには受け入れられなかった。流行の予想外の拡大と医療団の絶えざる説明・説得により住民の中に次第にその知識が浸透し、また、国際協力による施設・機材・人材が供給されて、流行は収束に向かった。

6. 2014年の西アフリカでのエボラの流行とその対策から得られた教訓は、(1) 早期発見、早期発信(WHOの緊急事態警告の遅れがあった)、早期対策(ヒトの移動の抑制や葬儀様式の変更など)の重要性、(2) 社会不安をいかに小さくして住民のパニックを押さえるかという情報発信の重要性、(3) 施設・機材・人材の準備の重要性、準備が間に合わない緊急の場合には国際協力で素早く補給する。また、安全に研究・治療を行える施設としてのBSL-4の重要性(日本など輸入感染の可能性のある国などでも)、(4) エボラ対策で手一杯だと、それ以外の健康被害への対策が手薄になる、(5) 現代は輸入感染症の時代であること、また、コウモリなどの動物から感染する人獣共通

感染症の重要性を認識すること。One Health(感染症については人と動物を一緒に考えて研究・対応をする)の概念を共有する。

7. 過去・現在、東西と時代・空間を超えた感染症への普遍的な教訓として、(1) 見えない物への恐怖は常にあり、恐怖を可能な限り減らすために情報発信を常に続ける重要性、(2) 病気の軽視が被害を拡大することを肝に銘じる。

寺田虎彦が言う「ものを怖がらなすぎたり、怖がりすぎるのはやさしいが、正當に怖がることはなかなか難しい」は全ての危機対策に共通するものである。

参考文献

加藤茂孝. 人類と感染症との闘い—「得体の知れないものへの怯え」から「知れて安心」へ—(続) 第8回「エボラウイルス病」—コウモリ由来の病? モダンメディア 2017; 63(3): 63-76.

(平成29年4月例会)

書籍紹介

佐賀医学史研究会 編著

『佐賀医人伝——佐賀の先人たちから未来への贈り物——』

「佐賀医学史研究会」から、創立10周年記念事業として、『佐賀医人伝』(佐賀新聞社発行: 1500円税別)が出版された。

本書は、江戸幕末期から明治時代までの佐賀出身の医人(医師)、126名の略歴・業績・資料・史跡・墓所などが、多くの画像と共に詳しく掲載されている。

26名の会員が、研究対象としている医人について分担して執筆している。

執筆者の中には、医人の史実の正確さを期するため自費で札幌・金沢・京都・東京・長崎など全国各地へ赴き、史料・史跡・墓所などを取材して、熱心な発掘活動を続けた会員もいる。今まで

知られてなかった医人を発掘した功績も大きい。

現在佐賀県が推進している「明治維新150年」記念事業が始まる好機に、出版で連携できた。これまで佐賀出身で全国的に著名な医人(伊東玄朴・相良知安・佐野常民・高安右人など)の単行本は多数出版されているが、県単位で多数の医人を、横断的に網羅した略伝の出版は、過去に全国的にも例がなく本書が初めてである。

幕末・明治期の佐賀県の医師をこの1冊で検索できるので、医学先進地であった当時の佐賀の姿を知る、貴重な医学基本文献である。佐賀藩主鍋島直正公は、多くの藩士を江戸・大坂・長崎などへ積極的に西洋医学稽古に派遣し、医人を育成し

た。シーボルト始め、長崎出島に來日したオランダ人軍医のポンペやボードウィン等から、蘭医学を学んだ多くの佐賀の蘭方医らは、最新の蘭医学を佐賀に広めた。また明治初期の医学校「好生館」に、お雇い医学教師として赴任したヨングハンス・スローンは、当初アメリカ医学を講義し、デーニツ・シモンズは、明治新政府が導入したドイツ医学を講義した。佐賀と関係が深い外国人医師も掲載している。

また吉岡弥生（現在の東京女子医大の創立者）、緒方トキ（佐賀県最初の開業試験合格女医）、大橋リュフ（太良町出身女医で、晩年に故郷へ篤志し「大橋記念図書館」と名付けられた）などの先

駆的女医が登場するので、興味は尽きない。

本書は、佐賀県医学史として貴重な文献であるばかりでなく、日本医学史の一端を知る上で不可欠の出版物として、会員諸氏へ推薦したい。

（相良 隆弘）

[佐賀新聞社、〒840-0815 佐賀県佐賀市天神3-2-23, TEL. 0952 (28) 2152, 2017年2月, A5版, 263頁, 1,500円＋税]

※佐賀医学史研究会は、『佐賀医人伝』出版により、学術振興と地域文化の向上に寄与したことで、「平成29年度 佐賀新聞文化奨励賞」（学術部門）を受賞しました。

渡部周子 著

『つくられた「少女」——「懲罰」としての病と死——』

本書は「少女」をテーマにした著者の二冊目となる単著である。前著、『〈少女〉像の誕生』（新泉社）は、『少女』に与えられたジェンダー規範の解明が目的であったが、本書では、「良妻賢母」というジェンダー規範が付与される新たな背景を探るとともに、「規範」からの「逸脱」者にとどのような「懲罰」が与えられたのか、その「表象」も明らかにしている。

はじめに本書が使う重要な言葉とその意味を確認しておきたい。まず書名にもある「少女」とは、「女子中等教育の制度化によって出現した、就学期にあって出産可能な身体を持ちつつも、結婚まで猶予された『生殖待機期間』（2頁）にある女子のこと、言い換えると、高等女学校に在籍する女学生である。また「規範」とは、明治期、国や教育界がこの「少女」に求めたジェンダー「規範」のこと、端的に言えば「良妻賢母」の思想だといえる。よって、「懲罰」とは、こうした「規範」の「逸脱」者が被らなければならない「病」の表象である。

以下に全三章からなる本書の目次を挙げ、続いてその概要と若干の感想を付すことにする。

〈目次〉

第一章 つくられた「少女」

第一節 「規範」と「逸脱」

第二節 先行研究と問題の所在

第二章 「規範」像としての「少女」—その源流を辿る

第一節 国の富強と種族の繁殖

第二節 女子教育界における科学思想の受容

第三章 「逸脱」者とはなにか—「懲罰」としての病と死

第一節 「懲罰」としての病

第二節 学校による管理

第三節 潜在的な病者

第四節 女子教育制限説

おわりに

第一章では本書の「問題意識」をまとめる。先行研究や研究方法の説明とともに本書が示す目的とは、「明治期を中心とする近代日本の教育界における、医科学の学説の影響についての考察」（7頁）であった。「明治期にこそ、『女子の心身』をめぐって議論が重ねられ、これを基盤として社会制度」（7頁）がつくられるが、著者は、ダーウィ